

69 絵画の中の日本 (2021年6月29日)

日本は、1867年に行われた第2回パリ万国博覧会に初めて参加しました。そこで浮世絵や磁器を始めとする工芸品が注目され、ジャポニスムのブームが巻き起こりました。モネ、ゴッホ、マネ、ルノワール、ドガといった画家たちは、日本の浮世絵から大きな影響を受けました。浮世絵は、それまでの西洋絵画にはなかった大胆な色使いや構図、西洋絵画の遠近法のルールとは異なる画法などがヨーロッパの画家たちを惹きつけたと言われていています。しかし、それらの画家たちの作品を見ても、絵画を見ただけでは具体的にどのように日本の絵画の影響を受けた作品なのか、素人には分からないことがあります。ここでは、一目見ただけで日本の影響が分かる絵画をご紹介します。

一つ目は、パリのロダン美術館にあるゴッホが描いた「タンギー爺さん」です。ゴッホは、浮世絵を買い集め、歌川広重の「江戸名所百景」や溪斎英泉の「雲龍打掛の花魁」を模写した油絵を描きました。「タンギー爺さん」の背景には複数の浮世絵が描かれており、そのうちの一つは、自ら描いた「花魁」です。タンギー爺さんことジュリアン・タンギーは、パリで画材屋を営みながら画商でもあった人物で、ゴッホやセザンヌなど当時は売れていなかった画家たちを経済的に支援しました。



また、オルセー美術館には、マネが友人で小説家のエミール・ゾラを描いた「エミール・ゾラの肖像」があります。背景には力士を描いた浮世絵があります。マネもゴッホと同様に浮世絵を蒐集していました。ゴッホやマネは、自分が集めていた浮世絵を描くことで、キャンバスの中に独自の世界を描きたかったのかもしれない。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

この他には、ジェームス・ティソによる「浴室のラ・ジャポネーズ」（ディジョン美術館所蔵）があります。ヨーロッパ人女性が着物を身にまとった姿は、当時の人の目には新鮮に映ったことでしょう。ちなみにティソは、徳川昭武のフランス留学中に絵画を教えました。昭武は、1867年に使節団を率いてパリを訪問して、博覧会を視察しました。



注：ジャポニスムには明確な定義があるわけではなく、これらの作品は、画家の日本趣味を表したものであって、日本の絵画の画法の影響を受けたものとは言い難いことから、ジャポニスムの前段階のジャポネズリーの作品であるとする考え方もあります。

実は、ジャポニスムよりも以前に、日本に関係するものが描かれたと考えられているヨーロッパ絵画があります。ルーブル美術館に展示されているフェルメール作の「天文学者」です。17世紀後半に描かれた作品の中で天文学者が着ている上着は、近年の研究によって、南蛮貿易によって日本からもたらされた綿入れ（どてら）をガウンに仕立て直したものではないかと考えられるようになりました。フェルメールは、日本を意識して上着を描いたわけではないと思いますが、日本人の目には綿入れ（どてら）のようにも見えて、興味深いです。

